

## 世界の片隅で、石ころを拾う

——桑島秀樹『崇高の美学』（講談社、2008年）を読む——

小田川 大 典

「崇高」の、しかも「美学」。このように重厚な表題を持ちながら、本書は、まるでカルチャー・センターでの口述を筆記したかのような軽妙な筆致で書かれている。しかも軽快なのは筆致だけでない。古今東西の、およそありとあらゆる崇高論について、著者の議論は時空の壁を越え、縦横無尽に駆け巡る。だが、考えてみれば、少なくともイギリスにかぎっていえば、崇高論が成立したのは、ハーバーマスが文芸的公共性と呼んだ「1680年から1730年の間の最盛期におけるコーヒー・ハウス」、すなわち、だれもが対等に参加できる、気軽なおしゃべりの空間であった（『公共性の構造転換』）。だとすれば、このような語りのスタイルは、崇高論にこそふさわしいといえなくもない。

芸術作品や自然がもたらす感動の中には、「美しい」ということばで尽くせない何かがある。その何かを、われわれはどういう言葉で語ればいいのか。マージョリー・ニコルソンによれば、この素朴な問いを最初に突き詰めたのは、グランド・ツアーの途上、アルプスの山嶺で「喜ばしい恐怖、恐ろしい喜び、限らない快感」を覚えたイギリス人たちであった。本来ならば完全な球体であるはずの地球の上に、醜く刻まれた山嶺——「大地の乳首、こぶ、いぼ、腫瘍」——がもたらす、とうてい「美しい」という形容詞では言い表せない「崇高」な体験。こうして胎動を始めた「美」と「崇高」の区別に、ニュートンの『光学』が、「プリズムがうみだす七種類の色彩の美しさ」と「色彩の背後にある無定形で圧倒的な光の崇高さ」というイメージを与え、世俗的な「色」の魅力を語る「美の美学」と、聖なる「光」の偉大さを称える——換言すれば、あらゆる世俗の色彩の美を相対的なものとして突き放す——「崇高の美学」が決定的に分節されるに至る。ニコルソンによれば、こうした山嶺論争と、ニュートン派詩人たちの「色彩」と「色」をめぐる思索の両方の成果に決定的な表現を与えたのが（著者の主な研究対象である）バークの『崇高と美の観念の起源の哲学的研究』であった<sup>1</sup>。

だが、こうしてバークによって最初の表現を与えられ、後にカントによって理論的に完成された崇高美学には、対照的な二つの方向性が潜んでいたと著者は指摘する。崇高論の歴史を辿るならば、圧倒的に主流の位置を占めてきたのは、「肉体ないし物質を離れた高い精神性」を求めて「上」を志向するカント的な崇高美学であった。だが、その一方で、このカント的なヒューマニズムに対抗するかのように、「この地上に生まれ、やがて「死すべき存在」として「生老病死を繰り返す、とても小さくはかない存在」である人間の住まう「下」の「地」の世界をただひたすら「凝視」することを説く反ヒューマニズムの系譜が、バークから、ラスキン、ジンメルへと受け継がれてきた。読者を惑わせかねない

<sup>1</sup> Majorie Hope Nicolson, *Newton Demands the Muse: Newton's Opticks and the Eighteenth Century Poets*, Princeton University Press, 1946; *do*, *Mountain Gloom and Mountain Glory*, Ithaca, 1959. (小黒和子訳『暗い山と栄光の山』国書刊行会、1989年)

ほどに多様の素材をカバーしつつも、本書が一貫して試みているのは、一方で「人間性の向上ないしは覚醒を基礎とする、きわめて道徳的な性格」をもち「コミュニティに有為な理性的個人たる「おとな」の創出」という「啓蒙のプログラム」を内包したカントの「人倫的崇高論」の危うさを指摘しながら、他方で「下」の世界における〈自然と人間〉の関係性の謙虚な「凝視」というバーク的な「大地の、山岳の、大自然の美学としての崇高論」を復権するという「十八世紀的崇高の読み直し」にほかならない。

著者は、本書第一・二章で崇高美学の成立史を辿った後に、第三章「山と大地の「崇高」——カントの人倫的崇高を迂回する道」において、近代における「山岳の思想」の中に、はるかに上方に霞む山頂をめざす登頂至上主義——自律的な自己克服の精神という点で「純粋芸術」と相通じる「ピーク・ハンティング」の思想——とは異なる、しっかりと足許を見つめて山路を踏み進む、山歩き（「藪こぎ」「溪歩き」「森林逍遥」）の思想の存在を指摘している。著者はそこで、「天」を目指す「ピーク・ハンティング」に比して、「地」へ向かう山歩きの思想が「異端」と見なされてきたことを認めてはいるものの、議論の力点は明らかに後者に置かれている。蓋し、「藪こぎ」の伝統の中には、「地」へ向かうバーク的な崇高美学——「「地」へとゆっくり沈潜し、そこにじっと留まる」思想——が脈々と流れ続けているのである。

しかし、カントの啓蒙的崇高論とは異なるバークの保守的な——人間の理性に決定的な懐疑を抱いているという意味で——崇高論が系譜として引き継がれているとして<sup>2</sup>、なぜ前者ではなく後者へ目を向けなければならないのだろうか。学説史的な観点からいえば、たとえばリオタールやホワイトといった現代の政治哲学者たちがバークの非カント的崇高論に注目しているという背景を指摘することができるかもしれない<sup>3</sup>。だが著者は第四章で、もっと切迫した、アクチュアルな問題状況を提示している。それは、20世紀の高度な「テクノロジー」と「資本主義経済の進展」と結びつくことで、啓蒙のヒューマニズムが辿りついた「アメリカ的崇高」——その一例として、90年代のカリフォルニアで活躍した伝説のロックバンド "The Sublime" が挙げられていることは注目に値する——のおぞましさと、いわばその帰結のひとつである「ヒロシマ」への原爆投下という「想像できないが、実際の歴史上現実化してしまった」惨劇——ベレル・ラングのいう「表象不可能」な「歴史的崇高」——の問題にほかならない<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> バークの保守主義については、アンソニー・クイントン『不完全性の政治学——イギリス保守主義思想の二つの伝統』（東信堂、2003年）を参照。

<sup>3</sup> こうした動向については拙稿「崇高と政治理論」『年報政治学2006-II』（2007年3月）を参照して頂きたい。

<sup>4</sup> カント的な人倫的崇高論と「アメリカ的崇高」との関係について、著者は明示的な説明を与えておらず、カント的ヒューマニズムの成れの果てが「アメリカン・サブライム」であるというのは評者の見立てに過ぎない。だが、第三章までのカント的崇高とバーク的崇高の対比は、第四章がカント的崇高美学の陥穽を「アメリカ的崇高」を例に説明し、それが突きつける問題に応答すべく、バーク的崇高論を「断片」から「全体」を受肉化させるアート化」として再構成する試みであるという読みを導くように思われる。無論、「アメリカン・サブライム」の根底にカント的ヒューマニズムや登頂至上主義の残響が認められるかどうかは、それ自体、極めてクリティカルな問題であるが。

だが、果たして、バーク的崇高論は、「アメリカ的崇高」に抗し、表象不可能な「歴史的崇高」の問題に応答することができるのだろうか。たしかに、ひとびとが日常生活の中で享受している「色彩」美を賢しらなヒュブリス（傲慢）として相対化するバークの崇高論は、無限増殖する「テクノ・キャピタリズム」に冷や水を浴びせ、その暴力に歯止めをかける一助となるかもしれない。だがそこで可能になるのは、近年のリスク社会論の言葉で言えば、専ら「事前警戒 precaution」だけであって、有効な「予防 prevention」ではないだろう<sup>5</sup>。また、歴史的崇高にかんしていえば、バークの崇高論にできることはほとんどないように思われる。では、本書の崇高をめぐる議論は、こうした問題についてどのような示唆を与えてくれるのだろうか。

おそらく、鍵となるのは、序論の「石ころへのオマージュ」——美学の書物であるにもかかわらず、本書は何と「石ころ」の話で始まる！——ではないだろうか。著者はどこにでも転がっている「石ころ」に、安易な自己投影（主観性）を拒む厳粛さ（客観性）と、にも関わらず、膨大な時空を痕跡として閉じ込めた「半永久的な時空の真空パック」——辻まことのいう「岩詰（がんづめ）」——という二つの側面を看取する。畏怖すべき「異物」として人間を拒みつつも、失われてしまった膨大な時空——まさに表象不可能な——を痕跡として暗示する「石ころ」。結論部で示される、そうした、ごくありふれた「断片」の「凝視」こそが、表象不可能な真実への道標を顕わにするという知見は、おそらく著者が長年に渡る古今東西の崇高論との対話の中でたどり着いたものなのであろう。そしてこうした知見を踏まえつつ、著者は「ヒロシマ」の「原爆ドームの存在様態とその美学的性格」の解明を試みている。表象不可能な「ヒロシマ」の全体に辿りつくには、「この世界の片隅」<sup>6</sup>で拾った石ころを眺めるように、原爆ドームを凝視し、断片を記述していくほかない。それがおそらく、表象不可能な「歴史的崇高」に応答する、ほとんど唯一の方法だと、著者は言いたいのではないだろうか。但し、そうした営為を著者のように「アート化」と呼ぶことについては、正直なところ、評者は躊躇を覚えないでもないけれど。

(岡山大学)

---

<sup>5</sup> 中山竜一「リスク社会における法と自己決定」田中成明編『現代法の展望・自己決定の諸相』（有斐閣、2004年）を参照。

<sup>6</sup> こうの史代『この世界の片隅に』（全3巻、双葉社、2008-2009年）を参照。おそらくこのタイトルのルビは、片山恭一のベストセラー小説のカント的な表題『世界の中心で、愛をさけぶ』（2001年）への対抗を意識した、きわめてバーク＝桑島的な意図が込められている。